

(別紙様式3)

博士論文要約 (Summary)

2015 年入学

人文社会科学部 地域政策科学専攻

氏 名 李 竺楠

タイトル	謝罪言語行動に関する日中対照研究 —インターアクションの視点からの考察—
<p>本論文は6つの章より構成されている。各章の内容は次のようになる。</p> <p>第1章の「序章」は3節から構成されている。第1節「謝罪研究の概観と本研究の位置づけ」では、本研究の対象である謝罪を、単なる発話行為ではなく、言葉によらない身体動作も含む言語行動(=コミュニケーション)の一種として捉えることを述べた。続いて、これまでの謝罪研究の動向を概観し、本研究を「謝罪の個別性に関する対照研究」と位置づけた。第2節「本研究における対照分析の枠組み」では、言語行動の対照分析のために、熊取谷(1993)が提示した4つの課題を発話行為レベルから言語行動レベルへと広げる必要があること、そのためにはインターアクションの視点から捉える必要があることを論じた。第3節「本研究の意義」では、熊取谷(1993)の対照研究の枠組みが抱えている問題点、つまり対照分析の理論的立場と分析の視点については、議論がまだ不十分であるという理論的な弱点を補うこと、また本研究における実証結果に基づく分析枠組みの新たな展開を示すことが、本研究による言語行動とその対照研究への重要な意義と考える。</p> <p>第2章の「各課題に関わる先行研究の批判的検討」は5節から構成されている。第1節から第4節においては、言語行動の対照研究の4つの課題のうち、課題1~3に関わる先行研究を批判的に検討した。その結果、課題1「謝罪目的」は関係修復であること、課題2「不快状況」について、課題3「謝罪方略と応答方略」について、それぞれの分類基準と下位分類の問題を解決することによって、第3章~第5章で行う対照分析のための理論的な基盤を準備した。また、課題4については、本研究の見解は熊取谷(1993)とは異なるため、第2章ではなく第6章であらためて検討することにした。最後の第5節では、本研究のデータ収集と分析の方法、および本論文の構成について述べた。</p> <p>第3章では、課題2「どのような状況(誰が、誰に、いつ、等)が当該言語行動の遂行を誘発するか」に答えるために、日中の「職場ドラマ」、「ホームドラマ」、「医療ドラマ」から収集した謝罪談話をデータとして、各作品に描かれる人間関係(「親疎関係」と「上下関係」と不快状況の種類および深刻度の点から対照分析を行った。</p> <p>職場ドラマを用いた分析結果は、次のようにまとめられる。</p> <p>まず、職場ドラマにおける謝罪の頻度についてである。日本の職場ドラマでは、約3分ご</p>	

とにひとつの謝罪談話が現れたが、中国の職場ドラマでは、約15分ごとにひとつの謝罪談話が現れた。つまり、職場ドラマにおいては、中国人より日本人のほうが頻繁に謝罪するように描かれているという結果になった。これは、しばしば言われる「日本人はよく謝るが、中国人はなかなか謝らない」という謝罪行動のステレオタイプの傾向が、職場ドラマの談話においても描かれているということと考えられる。本研究はそのことをデータの量的な分析によって確認したと言える。

次に職場場面の不快状況と人間関係との関連についてである。「ウチソト関係」から見ると、日本では「ウチ関係」、中国では「ソト関係」のほうに不快状況が頻出する傾向があった。また、「上下関係」からは、日本では「目下→目上」、中国では「目上→目下」のほうに不快状況が多く現れていた。このような差異は、今回選んだ職場ドラマの数が限られており、日中の職場ドラマが重点的に捉えている人間関係の違いによるものかもしれないが、日本のほうで謝罪の頻度が高いことと何らかの関係がある可能性も考えられる。

続いて、日中の職場ドラマではどのような不快状況が謝罪を誘発したかについてである。不快状況の種類から見ると、日本の謝罪は多数の不快状況で生じているが、中国の謝罪は少数の不快状況に集中して現れるという傾向が見られた。この傾向は日中の謝罪頻度の違いにつながるのではないかと考えられる。つまり、中国より日本のほうが謝罪の必要とされる不快状況の種類が多いために、中国人より日本人のほうが頻繁に謝罪するのではないかということである。

また、不快状況の深刻度から見ると、「中度」の不快状況による謝罪が一番多く、「重度」の不快状況による謝罪が最も少ない点は日中の間で共通していた。このような傾向が現れたのは、ひとつには「重度」の謝罪が求められるような状況は日常的にはそれほど多くないという現実（そしてそれがドラマにも反映されていること）に起因すると考えられるが、そのほかにも関係修復を達成するための手段としての言語による謝罪という行為の限界による可能性も考えられる。つまり、日中の言語社会において、言語による謝罪行動は「軽度」と

「中度」の不快状況に対してその有効性は見込めるが、「重度」の不快状況に対してはその深刻度から謝罪という言語による行動だけでは損なわれた人間関係の修復が十分に見込めないことも多いと考えられる。その場合は、謝罪以外に実質的な行動（弁償、辞職、裁判など）が必要となるため、のちの結果に影響を及ぼしかねない言語による謝罪は控えられるのかもしれない。

以上のような傾向が職場ドラマの不快状況については全体的に見られた。しかしながら、日本に比べて中国の職場ドラマから収集できた謝罪談話の数ははるかに少ない（日本：404例、中国：61例）ことを考えると、この分析で得た中国の職場場面の不快状況に関する結論の一般化について、強い主張をするのは難しいかもしれない。

また、ホームドラマを用いた分析結果は、次のようにまとめられる。

まず、ホームドラマにおける謝罪の頻度についてである。日本のホームドラマでは、約6分ごとにひとつの謝罪談話が現れたが、中国のホームドラマでは、約12分ごとにひとつの謝罪談話が見られた。つまり、ホームドラマにおいては、中国人より日本人のほうが頻繁に謝罪するように描かれているという結果が出た。この結果は、これまで言われてきた日中の謝

罪に関する「日本人はよく謝るが、中国人はなかなか謝らない」というステレオタイプの妥当性を、ホームドラマの談話データを用いて検証することができたと言える。

次に家庭場面の不快状況と親疎関係との関連についてである。日本のホームドラマでは「親密」の謝罪談話が多く（71.3%）、中国のホームドラマでは「疎遠」の謝罪談話が多い（57.3%）という傾向が見られた。

不快状況の種類については、「親密」の場合は日本のほうが不快状況の種類が多く（日本：16種類；中国：8種類）、「疎遠」の場合は中国のほうが不快状況の種類が比較的多い（中国：13種類；日本：10種類）という結果となった。これは謝罪行為の日中の差というより、ホームドラマに描かれた家族形態の異なりが原因の可能性を指摘した。また、日本の代表的な不快状況は、「親密」では「不作法、非常識な行動」、「疎遠」では「礼儀」であったが、中国の代表的な不快状況は「親密」「疎遠」ともに「不作法、非常識な行動」であった。

また、不快状況の深刻度については、家庭場面の「親疎関係」にもかかわらず、日本では「軽度」の不快状況による謝罪談話が全体の半分以上であり（親密 55.8%；疎遠：54.8%）、中国では「中度」の不快状況による謝罪談話が一番多く現れていた（親密：46.3%；疎遠：41.8%）。この結果から、テレビドラマの家庭場面においては、「軽度」の不快状況に対して謝罪が発生しやすい日本に比べると、中国では「中度」の不快状況に対して謝罪する場合が最も多いということが分かる。このような結果となったのは、日本では「軽度」の不快状況においても謝罪が求められること、中国では「軽度」は謝罪が必要な不快状況として認められにくいためではないかと考えられる。

そして、医療ドラマを用いた分析結果は次のようにまとめられる。

まず、医療ドラマにおける謝罪の頻度についてである。日本の医療ドラマでは約4分にひとつの謝罪談話が見られたが、中国の職場ドラマでは、約9分ごとにひとつの謝罪談話が見られた。つまり、医療ドラマにおいては、中国人より日本人のほうが頻繁に謝罪するように描かれているという結果が出た。この結果は、これまで言われてきた日中の謝罪に関する「日本人はよく謝るが、中国人はなかなか謝らない」というステレオタイプの妥当性を、医療ドラマの談話データを用いて検証することができたと言える。

次に医療場面の不快状況と人間関係との関連についてである。「ウチソト関係」からは、日中ともに「ソト関係」より「ウチ関係」のほうが、つまり医療者同士の間で不快状況がよく現れるという結果が出た。

また、「上下関係」からは、日中ともに「目下→目上」と「目上→目下」の2つに多かった。これは「上下関係」には「ソト関係」の例がなかったことも影響していると思われるが、それでも中国では「目下→目上」の謝罪が多かった。

このような不快状況と人間関係との関連を明らかにしたうえで、日中の医療場面の謝罪がどのような不快状況によって誘発されたかについては、次のことが言える。

まず、不快状況の種類については、ウチソトや上下にかかわらず、中国より日本のほうが多いことが分かった。このような差異は、日中の医療場面における謝罪頻度の違いとかかわっているのではないかと考えられる。今回選んだ医療ドラマでは、日本人の謝罪頻度は中国

人の2倍以上である(3.4.1を参照されたい)。つまり、中国より日本のほうが謝罪の必要な不快状況の種類が多いから、中国人と比べて日本人のほうがより頻繁に謝罪するのではないかということである。

また、様々な不快状況のうち、日中ともに「不作法、非常識な行動」が謝罪を誘発する重要な不快状況であるが、「注意喚起」は日本のほうで、「法律、規則、命令、約束に違反する」は中国のほうでより重視される違いもあった。

次に、不快状況の深刻度である。3つの深刻度のうち、日本では8割以上、中国では7割以上の謝罪が「軽度」と「中度」の不快状況によって生じたことが分かった。「軽度」と「中度」と比べて「重度」の不快状況が少なかったのは、ひとつには「重度」の謝罪が求められるような状況は日常的にはそれほど多くないということに起因すると考えられるが、ほかにもこれは関係修復を達成するための手段としての言語による謝罪という行為の限界によるという可能性も考えられる。

また、医療場面の人間関係にもかかわらず、日本では「軽度」の不快状況が最も謝罪を誘発しやすいと考えられる。一方、中国では、「ウチ関係」の人間に対して「中度」の不快状況、「ソト関係」の人間に対して「軽度」が不快状況による謝罪が一番多いのが特徴である。これは、日本では「軽度」の不快状況でも謝罪が求められるという認識が強いが、中国ではそのような認識はそれほど強くないためと考えられる。

第3章では、謝罪の対照研究の課題2「どのような状況(誰が、誰に、いつ、等)が当該言語行動の遂行を誘発するか」を明らかにするため、日常生活の代表的な場面である「職場場面」、「家庭場面」、そして「医療場面」に焦点を当て、それぞれの場面における人間関係(「親疎関係」と「上下関係」)との関連において、不快状況の種類と深刻度の2つの側面から日中の対照分析を行った。その結果、日本ドラマでは謝罪がより多数の種類 of 不快状況で生じているのに対し、中国ドラマでは謝罪が少数の種類 of 不快状況に集中していることが明らかとなった。また、日中ともに「重度」の不快状況より、「軽度」あるいは「中度」の不快状況が引き起こした謝罪が多いことも分かった。

謝罪の対照研究は、課題3のような「謝罪方略」に研究の焦点が当てられてきた。その一方、課題2の「不快状況」については言及されることはあっても、そのほとんどは「謝罪表現」を明らかにするための状況設定として扱われており(池田, 1993; 趙, 2012など)、「不快状況」自体が研究対象とされたものは見られなかった。熊取谷(1993)でも、不快状況についてその概念や分類、特徴など理論的な考察は行われていたが、実証的な検証は行われていなかった。しかしながら、本章の不快状況に関する日中の対照研究では、このような空白を埋めることを試みた。

第4章と第5章では、課題3「当該言語行動の遂行に送り手と受け手はそれぞれどのような方略を使用するか」に答えるために、2.3の「謝罪方略」および2.4の「応答方略」の分類の枠組みをもとに、「家庭場面」と「医療場面」において、送り手の謝罪方略(第4章)と受け手の応答方略(第5章)が人間関係(親疎関係・上下関係)と不快状況の深刻度によってどのように異なるかを、方略の「種類」、「使用のあり方」、「組み合わせ」の3つの側面から検討した。

第4章ではドラマの「家庭場面」と「医療場面」で生じた謝罪談話を、謝罪の送り手が用いる謝罪方略が人間関係（「親疎関係」・「上下関係」）と不快状況の深刻度によってどのように異なるかを、謝罪方略の「種類」、「使用のあり方」、「組み合わせ」の3つの側面から対照分析をしてきた。その結果、謝罪の送り手による修復作業のパターンに関する日中の共通点と相違点について次のことが言えると考えられる。

まず謝罪方略の種類についてである。不快状況の深刻度が高くなると、送り手が用いる謝罪方略の種類も多くなるという一般的な傾向は日中の医療ドラマにおいて確認できた。このような傾向は、深刻度の低い不快状況より深刻度の高い不快状況のほうがより慎重な謝罪が必要であるという認識が日中ともにあるためと考えられる。その一方で、日本のホームドラマでは「重度」の不快状況に対する謝罪方略の種類が最も少なく、中国のホームドラマでは「中度」の不快状況に対する謝罪方略の種類が一番多かった。また、日本の医療ドラマではソト関係の場合は「中度」の不快状況に対して、中国の医療ドラマではウチ関係の場合は「中度」の不快状況に対して、謝罪方略の種類が一番多かった。このような結果は、関係修復を達成するための手段としての言語による謝罪という行為の限界によるという可能性が考えられる。

次に謝罪方略の使用のあり方である。4つの上位方略のうち、主に「侵害」、「後悔」、「責任」の3つを用いての修復作業遂行が日中ともによく見られた。2.3で述べたように、「関係修復に関する方略」は「関係修復」という謝罪の目的に由来し、「侵害に関する方略」、「後悔に関する方略」、「責任に関する方略」はそれぞれ「侵害」、「後悔」、「責任」という謝罪を構成する3つの条件（謝罪の定義）に由来する。上記の分析結果は、家庭場面や医療場面などの日常場面における謝罪が、「関係修復」という謝罪の目的に直接触れるよりも、「侵害」、「後悔」、「責任」という謝罪を構成する3つの条件に言及することによって、間接的に「関係修復」という目的を達成するという日中に共通の傾向があることを示していると考えられる。

一方、3つの上位方略のうち、日本では「後悔」と「侵害」が中心で「責任」の使用は少ないこと、それに比べて中国では「侵害」と「責任」が中心であり、「後悔」の使用は少ないことが異なっていた。このような結果は、「侵害」、「後悔」、「責任」という3つの条件の優先順位が日中で異なることを意味するのではないかと考えられる。つまり、謝罪を構成する3つの条件のうち、日本では「責任」よりも「後悔」と「侵害」の2つが、中国では「後悔」よりも「侵害」と「責任」の2つが重視されるということである。

また、下位方略については、日本では「後悔」の下位方略である「悔いを表明する」、また「侵害」の下位方略である「侵害を認める」の2つが頻繁に使用されるが、中国では「侵害」の下位方略である「侵害を認める」と「理由・状況を説明する」、「責任」の下位方略である「責任を認める」と「補償を申し出る」がよく使われており、また同時にほかの多種類の下位方略もある程度は使用される傾向があった。つまり、頻用される下位方略もそうではない下位方略も日本より中国のほうが多数であると言える。この結果の背景には、送り手の修復作業には日本より中国のほうがより複雑で様々なバリエーションがあることが原因ではないかと考えられる。

最後に謝罪談話の構成からは、日中ともに不快状況の深刻度が高くなると謝罪談話を構成するターン数も増える傾向にあった。深刻度の低い不快状況より、深刻度の高い不快状況のほうがより慎重な謝罪が必要であるという認識は日中どちらにも見られると言える。その一方で、日本の医療ドラマの「ソト：目下→目上」の場合、また中国の医療ドラマの「ウチ：目下→目上」と「ウチ：同等」の場合は、「中度」の不快状況に対して謝罪談話のターン数が一番多かったと、一般の傾向と異なる結果も現れた。このような結果も、上述した関係修復を達成するための手段としての言語による謝罪という行為の限界によるという可能性が考えられる。

また、日本ドラマより中国ドラマの謝罪談話のほうがより多くのターンによって構成されているという違いも見られた。このような結果となったのは、修復作業というプロセスは日本より中国のほうがより複雑であることが原因ではないかと考えられる。一方、医療ドラマの「ウチ：同等」と「ソト：目上→目下」の場合は、「重度」の不快状況には中国より日本のターン数のほうが多いということもあった。これは、日本ではこの2つの人間関係が深刻度の見積もりにより大きな影響を与える可能性があることを示すものと考えられる。

第5章は、第4章同様、謝罪の対照研究の課題3「当該言語行動の遂行に送り手と受け手はそれぞれどのような方略を使用するか」について検討を行った。この章も、日常生活のなかで重要な場面と考えられる「家庭場面」と「医療場面」に焦点を当て、謝罪の受け手が用いる応答方略が人間関係（「ウチソト関係」・「上下関係」）と不快状況の深刻度によってどのように異なるかについて、応答方略の「種類」、「使用のあり方」、「組み合わせ」の3点から対照分析を行ったが、第4章とは異なり、謝罪の受け手がどのような表現形式を用いて修復作業に応答するかという点から検討した。その結果、謝罪の受け手による応答パターンに関する日中の共通点と相違点について次のことが言えると考えられる。

場面や人間関係、不快状況の違いにもかかわらず、謝罪という修復作業に対して「拒絶」より「受入」で対応する傾向は日中の中で共通している。つまり、修復作業への反応として、「拒絶」よりも「受入」のほうがより好ましい選択であると言える。送り手と受け手のインターアクションという点から考えれば、謝罪とは不快状況の生起によって人間関係のバランスが崩れた場合に、送り手が修復作業を行い、受け手はそれを受け入れ、両者とも関係修復という目的を達成するための努力をするやり取り（相互行為）と解釈できる。また、不快状況の深刻度が高くなれば、「拒絶」の割合も上昇する傾向が日中どちらでも見られたが、それは不快状況が深刻になればなるほど、関係修復という目的の達成がより困難となるためと考えられる。

では「受入」という謝罪の受け手の反応にはどのような意味があるのだろうか。応答方略の「種類」、「使用のあり方」、「組み合わせ」の3つの側面から分析結果を整理する。

まず、応答方略の種類については、不快状況の深刻度が上がれば、応答方略の種類も多くなることが考えられる。本章の分析からは、この予想と一致した傾向が日中の中で確認できた。第4章で検討した謝罪方略と合わせて見ると、不快状況の深刻度が上がれば、関係修復のために使用される方略の種類も多くなるという傾向は、謝罪の送り手と受け手の間で共通していた。これは、不快状況が深刻になればなるほど、関係修復という目的の達成がより困

難となるという認識が日中ともにあるためと考えられる。

その一方で、場面や人間関係からは、深刻度の一番高い「重度」の不快状況に対して応答方略の種類が一番少なく、「中度」の不快状況に対して応答方略の種類が一番多いと、予想と異なった傾向も日中ドラマでは見られた。これは関係修復を達成するための手段としての謝罪という行為の限界によるかもしれない。

また、応答方略の使用のあり方については、4つの上位方略のうち、日中ともに「侵害」、「後悔」、「責任」の3つが中心的な役割を果たしており、この傾向は謝罪の送り手と受け手の間で共通していた。2.3で述べたが、「関係修復に関する方略」は「関係修復」という謝罪の目的に由来し、「侵害に関する方略」、「後悔に関する方略」、「責任に関する方略」はそれぞれ「侵害」、「後悔」、「責任」という謝罪を構成する3つの条件（謝罪の定義）に由来するものである。これまでの家庭場面や医療場面などの分析結果からは、不快状況に対して謝罪の送り手も受け手も「関係修復」という謝罪の目的に直接触れるより、「侵害」、「後悔」、「責任」という謝罪を構成する3つの条件から不快状況を解消もしくは低減することによって、間接的に「関係修復」という目的を達成する傾向が日中の中で共通して見られた。

一方、日中の応答方略の相違点は、3つの上位方略のうち日本ドラマでは「侵害」と「後悔」が、中国ドラマでは「侵害」と「責任」が中心であるという点に見られた。これは、第4章で検討した謝罪方略と同じ傾向を示している。このような傾向は、「侵害」、「後悔」、「責任」という3つの条件の関係修復のプロセスにおける優先順位が日中で異なることを意味するのではないかと考えられる。つまり、謝罪を構成する3つの条件のうち、日本社会では「後悔」と「侵害」の2つは重要視とされるが、中国社会では「侵害」と「責任」の2つが重点的に捉えられると解釈できる。

そのほか謝罪談話の構成の面からは、不快状況の深刻度が高くなると、謝罪談話を構成するターン数も増える傾向になることが予想される。本章の分析では、日中ともに予想と一致した傾向が見られた。このような傾向は、不快状況が深刻になればなるほど、関係修復のプロセスはより複雑になるという認識が日中ともにあるためと考えられる。

その一方で、日本のホームドラマでは深刻度の一番高い「重度」の不快状況に対して謝罪談話のターン数が最も少なく、中国の医療ドラマの「ウチ：下→上」の場合は「中度」の不快状況に対して謝罪談話のターン数が最も多いという傾向も現れた。このような傾向は、収集できた謝罪談話の数にもよるかもしれないが、上で述べた謝罪が関係修復を達成するための手段としての限界による可能性もあると考えられる。

また、談話の構成全体から見ると、日本ドラマより中国ドラマのほうが謝罪談話はより多くのターンと上位方略によって構成されていた。この分析結果からは、日本社会に比べると、中国社会における関係修復のプロセスはより複雑であるのではないかと考えられる。

最後に応答方略の組み合わせについてである。不快状況の深刻度が高くなると、単独の上位方略で謝罪に応答する傾向が減少し、複数の上位方略を組み合わせる修復作業に応答する傾向が増えることが予想される。本章の分析からは、この予想と一致した傾向が日中どちらでも確認できた。第4章で検討した謝罪方略の結果と合わせて見ると、不快状況の深刻度が高くなると、謝罪の送り手も受け手も多くの上位方略を駆使して関係修復を遂行しようとす

る傾向は日中の間で共通していた。このような傾向は、不快状況が深刻になればなるほど、関係修復のプロセスはより複雑になるという認識が日中ともにあるためと考えられる。

第6章では、テレビドラマの謝罪談話における方略使用が相互行為による談話の構造上の特性とどのように関わるかという点から、対照分析の課題4に対して答えることを試みた。熊取谷(1993)が示したのは発話行為の対照研究の枠組みであるが、この枠組みを謝罪など発話のやり取りやターン交替の連鎖で形成される言語行動へと広げるのであれば、これまで議論してきたその他の課題への対応も含めて以下のような点を新たに考えなければならない。

まず、ある特定の言語行動は、あるコンテキストにおける人間関係のもとで何らかの目的をもって遂行されるものという前提を立てておくことにする。そうすると、言語行動の対照研究の課題は次のように書き換えることが必要ではないかと考えられる。課題1の言語行動の動機・目的は、発話行為の場合と同様と考えてよいであろう。次に課題2については、その遂行につながる状況の生起があること、またその状況がどの程度当該言語行動の遂行を必要とするかについて検討するための問いとなるべきである。また、課題3については、表現形式だけの問題ではなく、言語行動の目的達成を目指して発動される方略とその方略が求められる場(または文脈)、そして参加者の人間関係の影響を考慮して検討を行う必要が出てくると考えられる。最後に課題4であるが、「発話行為の談話構成上の機能」は、言語行動のレベルにおいては、発話を当該のコンテキストにおいて意味づける方略が先述の3つの談話を構成する特性を背景にどのように実現されるかを考えることと言える。

このように考えると、言語文化間の類似と異同を言語行動レベルで捉えるための対照研究には、対人的要素や言語の運用面への配慮をさらに強化させたインターアクションの視点を導入する必要があることを主張しておきたい(cf. ザトラウスキー, 2014)。具体的には、熊取谷(1993)に以下のような補正を施した4つの課題に答えることで、言語行動を発話レベルではなくインターアクションとして捉えることができると考えられる。

課題1. どのような動機・目的の元に当該言語行動が遂行されるか

課題2. どのような状況(誰が、誰に、いつ、等)が当該言語行動の遂行を誘発するか、またその状況のあり方がどのように言語行動へつながるか

課題3. 当該言語行動遂行に発動される方略と表現形式にはどのような関係が存在するか、またそれには場や人間関係がどのように関与するか

課題4. 当該言語行動はどのような談話構成によって達成される/されないか、またその談話構成にはどのような構造上の特性が影響しているか

本研究では、これらの課題に対して答えることを行ってきた。その結果、「日本人はすぐ謝る」、「中国人はなかなか謝らない」という印象として語られてきた文化差が、それぞれの言語文化での不快状況への対応、方略の内容と使用、談話構成の特性など言語行動レベルの分析によって具体的なかたちで捉えることが可能であること、またそれが梁(2019, 2021)のような談話プロセスの文化差を捉える説明モデルと接続できる可能性を示した。発話行為理

論は言語使用に行為の遂行という新たな一面を示したが、行為そのものはそれが生じる際の場合や文脈、人間関係等によってさまざまな影響を受ける。それらを包括的にインターアクションという視点から取り込むことで、より精密な言語文化間の対照研究が可能になるのではないかと筆者は考えている。

【本研究の意義】

熊取谷（1993）が提示した対照研究の枠組みは、個別の発話行為の成立を当該談話における言語行動全体のなかで捉えるものであり、異なる言語間の対照的言語行動の一般的な分析の枠組みとなりうる重要な試みである。しかしながら、各課題（特に課題3～4）への捉え方から見ると、この枠組みは「発話行為」の枠を超えていないところがあり、対照分析の理論的立場と分析の視点に関する議論も不十分であるという問題がある。本研究はその問題点を解消するため、熊取谷（1993）の理論的な弱点を補い、その枠組みをさらに包括的なものへと発展させたものである。

熊取谷（1993）自身は、日英語の謝罪を例に取って4つの課題を検討した結果、それぞれの課題への答えを出すことによって、その枠組みの有効性をある程度までは検証することができた。しかしながら、彼の考察では、対照分析の枠組みの構築に重点が置かれ、4つの課題への検証は、日英語の具体例を挙げながらその異同を説明するにとどまり、量的な分析による検証は行われていなかった。また、彼の課題4への答えは、実際には受け手の立場から捉えた課題3への答えになるべきものであった。その原因は、熊取谷（1993）では言語行動の対照研究を行う際に相互行為という分析の視点が主張されていたものの、その認識が不十分であったため、課題3に関する受け手の応答方略の問題を課題4のなかで検討し、結果として課題3への答えの一部が課題4への答えとして出されてしまったことによる。この問題点を是正するため、本研究では、受け手の応答方略を課題3に関する問題として捉え、第5章で対照分析を行った。また課題4については、熊取谷（1993）の「修復作業における先導型」と「談話構造のモデル化」に関する議論をもとに、第3章～第5章の対照研究の結果を加えて、日中の謝罪談話の先導型および構造に関する特徴を明らかにし、インターアクションの視点を徹底することによって、課題4の談話構成に関する「柔軟性」、「主導性」、「連動性」という3つの特徴を課題4への答えとして示した。このようにして、本研究は言語行動の対照研究にインターアクションの視点の重要性を主張した。

このように、熊取谷（1993）の理論的な補足とインターアクション視点の徹底、そしてその実証結果に基づく分析枠組みの新たな展開を示すことが、本研究による言語行動とその対照研究への重要な意義と考える。

【本研究の問題点とこれからの課題】

まずは研究データの質的と量的な問題である。本研究は実証的な研究として、日中のテレビドラマから収集した謝罪談話をデータとして使用した。ドラマの謝罪談話は現実の謝罪談話の投影と見なすことは不可能ではない。その意味ではドラマの談話の有効性は認められるが、その一方で、いくら自然に聞こえても作られた謝罪談話は実際の謝罪談話と異なること

るが必ずあるので、ドラマで得た結論がどれほど現実の謝罪言語行動の特徴を反映できるかは疑問の余地が残る。また、本研究では日本ドラマ 11 本、中国ドラマ 3 本を使ったが、謝罪談話の合計数から見て、日中の中で大きな異なりが現れ（日本：913 例、中国：265 例）、人間関係と不快状況にしたがって細かく分類すると、各項目に割り当てられた謝罪談話の数がかなり少なくなった。そのため、すべての人間関係および不快状況に関する対照分析を行うことができなかつた。またわずかに十数例の謝罪談話から得た分析結果については一般化できるかどうかの懸念は拭えない。したがって、これからはドラマの本数を増やし、さらなる詳細な調査の必要があることは言うまでもない。

また、本研究は言語行動の対照分析のためにより妥当性の高い枠組みを提示する試みでもあった。この枠組みの妥当性を検証するため、日中の謝罪言語行動に限定して対照分析を行ったが、謝罪のほかにも感謝や依頼、断りなどほかの言語行動に対しても、本研究の枠組みが有効であるかどうか、つまり本研究の枠組みは本当の意味の言語行動の対照研究の一般的な枠組みとして機能できるかどうかについては、今後謝罪以外の言語行動を対象に具体的に検証する必要がある。

【主要参考文献】

Brown, C. P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*.

Cambridge University Press. 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』(2011)

田中典子（監訳）、齊藤早智子、津留崎毅、鶴田庸子、日野壽憲、山下早代子（訳）研究社.

Fraser, B. (1981) On apologizing. In Florian Coulmas (ed.), *Conversational Routine:*

Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech (pp. 259-271). Hague: Mouton Publishers.

Goffman, E. (1971) *Relation in Public : Microstudies of the Public Order*. New York, Basic Books.

彭国躍 (1992) 「謝罪行為の遂行とその社会的相関性について：中日社会語用論的比較研究」『大阪大学日本学報』11, 63-82.

彭国躍 (2005) 「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」『日本語学』24(4), 78-90.

池田理恵子 (1993) 「謝罪の対照研究：日米対照研究：Face という視点からの一考察」日本語学 12(12), 13-21.

北山環 (2014) 『ビジネス場面におけるポライトネスの考察：アメリカ・イギリス・日本映画に表れる依頼・対立・謝罪表現の分析』大阪教育図書.

Kumagai, T. (1993) Remedial interactions as Face-Management : the case of Japanese and Americans. *Honor of Tokuichiro Matsuda*, Iwasaki Linguistic Circle, Tokyo (1993), 278-300.

熊谷智子 (1993) 「研究対象としての謝罪：いくつかの切り口について」日本語学 12(12), 4-12.

熊谷智子 (2013) 「日本語の謝罪をめぐるフェイスワーク：言語行動の対照研究から」『東京女子大学比較文化研究所紀要』(74), 21-36.

熊取谷哲夫 (1986) 「APOLOGY とその適切性条件について」THE NORTHERN REVIEW

- NO.14, 17-33, 北海道大学英語英文研究会.
- 熊取谷哲夫 (1988) 「発話行為理論と談話行動から見た日本語の『詫び』と『感謝』」『広島大学教育学部紀要』第二部(37), 223-234.
- 熊取谷哲夫 (1990) 「日英発話行為対照研究の枠組みを求めて」 Conference Handbook, 166-171. 日本英語学会.
- 熊取谷哲夫 (1992) 「発話行為対照分析の課題(1) : 日英語の『詫び』の対照を例に」『広島大学日本語教育学科紀要』2, 35-41.
- 熊取谷哲夫 (1993) 「発話行為対照研究のための統合的アプローチ: 日英語の「詫び」を例に」『日本語教育』(79), p26-40.
- Mills, Brett. (2009) *The Sitcom. TV Genres*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 三宅和子 (1993) 「視点の観点からみた『感謝』と『詫び』: 慣用表現とともに使われる表現: 日英比較」『東洋大学短期大学紀要』25, 203-214.
- 三宅和子 (1994) 「『感謝』と『詫び』における発話者の視点: 付加表現の使われ方: 日英比較」『日本語教育方法研究会誌』1(2), 20-21.
- 森山卓郎 (1992) 「関係修復のコミュニケーション: 現代日本語のお礼とお詫びの定形表現」『藤森ことば論集』270-292, 清文堂出版.
- 中田智子 (1989) 「発話行為としての陳謝と感謝: 日英比較」『日本語教育』(68), 191-203.
- ネウストプニー (2003) 「日本の言語行動の過去と未来」北原保雄 (監修) 荻野綱男 (編集) 『朝倉日本語講座9 言語行動』, 1-28, 朝倉書店.
- 西山祐司 (1983) 「発話行為」安井稔・西山祐司・中右実・山梨正明・中村捷, 『意味論』627-690, 大修館書店.
- 荻野綱男 (2003) 「言語行動の調査法」北原保雄 (監修) 荻野綱男 (編集) 『朝倉日本語講座9 言語行動』, 215-240, 朝倉書店.
- Olshtain, E., & Cohen, A. (1983). *Apology: A speech act set*. In N. Wolfson, & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition* (pp. 18-36). Rowley, MA: Newbury House.
- 王源 (2009) 「日中における謝罪行動の対照研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』12, 223-236.
- 大谷麻美 (2000) 「謝罪定型表現の日・英語対照研究」『言語文化と日本語教育』20, 90-97.
- 大谷麻美 (2001) 「謝罪表現の日・英語対照研究: 談話における機能を中心に」『日本英語コミュニケーション学会紀要』10(1), 38-47.
- 大谷麻美 (2002) 「謝罪慣用表現と謝罪心理: 日・英対照研究」『日本英語コミュニケーション学会紀要』11(1), 17-26.
- 大谷麻美 (2004) 『謝罪と感謝の日・英対照研究: 話し手の心理からの考察』お茶の水女子大学学位請求論文.
- 大谷麻美 (2008) 「謝罪研究の概観と今後の課題: 日本語と英語の対照研究を中心とした考察」『言語文化と日本語教育』(一), 24-43.
- Owen, M. (1983) *Apologies and Remedial Interchanges: A Study of Language Use in Social Interaction*. Berlin, New York and Amsterdam: Mouton.

- Rieger, Caroline L. (2017) I want a real apology : A discursive pragmatics perspective on apologies. *Pragmatics* 27(4), 553-590.
- 李竺楠 (2017) 「医療ドラマにおける謝罪言語行動の中日対照研究」『地域政策科学研究』(14), 21-38.
- 李竺楠 (2017) 「職場ドラマにおける謝罪表現の中日対照研究：『謝罪場面』と『謝罪頻度』を中心に」『社会言語科学会第40回大会発表論文集』, 160-163.
- 梁英聖 (2019) 「日本型謝罪テクノロジー(3)作家の書くべき／書くべきでないの2択ではない、第3の選択肢＝『週刊ポスト』の表現の自由を守る差別禁止ルールを」
<https://note.com/ryangyongsong/m/mbda01098a53>. 最終閲覧日 2021年10月20日
- 梁英聖 (2021) 「日本型謝罪は『地獄のクソゲー』大谷差別発言で処分の米国との違い」朝日新聞 2021年10月11日掲載.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge University Press. 坂本百大・土屋俊 (訳) 『言語行為：言語哲学への試論』(1986) 勁草書房.
- 渋谷勝己 (2003) 「言語行動の研究史」『朝倉日本語講座 9 言語行動』朝倉書店, 241-261.
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究」第18回日本語・日本語教育を研究する, 6-7.
- 杉戸清樹 (1992) 「言語行動」『社会言語学』桜楓社.
- 高橋優子 (2005a) 「日本人と中国人のコミュニケーション方略に関して：『謝罪行為』に注目して」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』(18), 49-56.
- 高橋優子 (2005b) 「日中の謝罪のコミュニケーション方略に関する一考察：『補償の行為の申し出と行為の実行状況』に着目して」『異文化コミュニケーション』(8), 221-238.
- 高橋優子 (2012) 「これまでの日中の『謝罪』表現研究の問題点と今後の課題」『文化外国語専門学校紀要』(25), 1-8.
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社.
- Tanaka, N., Spencer-Oatey, H., Cray, E. (2000) 'It is not my fault!': Japanese and English responses to unfounded accusations, In Spencer-Oatey, H.(Ed), *Culturally speaking*, London: Continuum, 75-97.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction : an introduction to pragmatics*. Longman Press.
- 陶琳 (2005a) 「“对不起”と『すみません』について」『比較文化研究』(69), 97-108.
- 陶琳 (2005b) 「人間関係修復のための方略：謝罪表現を中心に」『社会環境研究』10, 33-45.
- 陶琳 (2008) 「中国語と英語における謝罪表現の考察」『人間社会環境研究』(16), 75-85.
- 趙翻 (2015) 『日本語と中国語における謝罪の社会言語学的研究：対人関係と地方差に着目して』2015年度東洋大学審査学位論文.
- 山梨正明 (1986) 『発話行為』大修館書店.